

「ファスト恋愛」

—初稿—

2026/1/19

〈人物表〉

浅川 真希 あさかわ まき (17)

丸バツ高校の三年生

角田 早苗 つのだ さなえ (17)

真希の幼馴染でクラスメート

岡宮 健吾 おかみや けんご (17)

転校生でサッカー部

西畑 由良 にしはた ゆら (16)

二年生でサッカー部のマネージャー

1. 丸バツ高校・構内（朝）

満開の桜の木々。春風に揺れ花びらを散らしている。校門をくぐり、登校する生徒たち。

真希 「王子様？」

と、浅川真希（17）、冷めた感じ。

並んで歩く角田早苗（17）、いかにもという恋愛少女漫画片手に熱弁。

早苗 「そう。王子様風の男の子が転校してきて……」

真希 「早苗、まず象徴天皇帝の日本には国王も王子もないよ」

早苗、話の腰を折られてイラつく。

早苗 「だから王子様、風。イケメンですらっとして背が高くって」

少女漫画の表紙にはヒロインと、王子様風の男子。

真希 「王子に風とかはない。血が全て」

早苗 「見た目の話」

真希 「なんで早苗が諸外国の王子の見た目に詳しいんだ？ 世

界史だって赤点……」

早苗、たまらず少女漫画で真希の頭をぶっ叩く。

真希、恨めしい顔でズレた眼鏡を直す。

早苗 「真希には分かんないか。このキュンキュンが」

真希 「は？」

早苗 「現れるんだよ。王子様が」

真希 「それ、シンデレラコンプレックスと呼ばれる……」

早苗、もう一発ぶち込もうとする。

と、真希の足元にサッカーボールが転がってくる。

健吾の声 「あ、ごめーん」

制服姿の岡宮健吾（17）、グラウンドから颯爽と

駆けてくる。すらっと背が高く前髪を靡かせている。

早苗、その姿に思わず、息を呑む。

健吾、立ち止まって、蹴れと言わんばかり。

真希、困惑。

ややあって、不恰好なキック。空振り。

健吾 「……ぷっ」

駆け寄ってボールを拾い上げ、

健吾 「ナイストライ」

と、鼻で笑う。

真希、ムツと睨む。見上げるほどの身長差。

由良の声「センパイイ？」

と、グラウンドから呼びかける西畑由良（16）。

健吾 「じゃ」

健吾、後にする。

真希 「何あいつ。ヤな感じ」

早苗、ニヤリ。

2. 丸バツ高校・教室（昼）

健吾、黒板に名前を書く。大きな拍手と黄色い歓声。

頬杖を付いている真希、あっけに取られて見ている。

健吾、教師に促されるまま真希の隣に座る。

健吾、気安く挨拶。真希、プイッとそっぽを向く。

3. 丸バツ高校・教室（昼）

授業中。

健吾、机をくっ付け真希の教科書を見ている。

真希、恨めしい顔。

健吾に淡い視線を送る女子らと、何やら笑顔の早苗。

4. 丸バツ高校・教室（昼）

健吾、教卓の割り箸くじを引くと、先端に赤い印。

どよめく教室。黄色いブーイング。

真希の手には同じく赤い印のついた割り箸。

教師、黒板の「実行委員 浅川」の隣に「岡宮」と

書く。早苗に続いてパラパラと拍手する一同。

健吾 「あ、よろしく」

真希、頭を抱える。

5. 近くの百貨（昼）

真希、カートを引いている。カゴには大量の画用紙

や折り紙、ハサミやカッターなど文房具で満載。

真希、ズンズンと店内を歩いてカートのカゴに商品

を次々投げ入れていく。続く、手ぶらの健吾。

真希 「言ったよね？ 部活行っていいって。委員の仕事もこっちでやるから」

と、ぶっきらぼうな感じ。

健吾 「部活、今日休みだから」

真希 「そんなつまんない感じで来られても迷惑なんだけど」

健吾 「え、つまんなくないよ」

真希 「遠慮はいい」

健吾 「遠慮してないよ」

真希 「遠慮は遠くを慮（おもんばか）るだから目先のこと集中してなきゃ遠慮してるの。これ孔子ね」

と一息で吐いた後、ハッと我に返る。

健吾、ぷっと吹き出す。

健吾 「やば。真希ちゃん、やっぱおもしろ」

真希 「……は、はあ？」

と、赤面。

健吾 「真希ちゃんと一緒に安心したわ。俺、まだみんなと仲良くなくてさ」

真希 「別に、これも仲良くないから」

真希、レジにカゴを乗せようとするが、重い。

健吾、すかさず手伝う。

互いの指が触れて真希、思わず手を引っ込める。

健吾 「あ、領収書もらわないとだよね」

真希、引っ込めた手をまじまじと見る。

健吾 「真希ちゃん？」

真希 「え、あ、うん」

早苗、その様子を物陰からニヤニヤと見ている。

6. 丸バツ高校・教室（夕）

放課後。教室内には他に誰もいない。

早苗 「キュンキュンですか？」

真希 「は？」

教室の後方に広げた模造紙。巨大貼り絵の製作途中。千切った画用紙をペタペタと貼る早苗と、横で頭を

抱える真希。

早苗 「サッカー部のイケメン転校生と最初陰悪だったけどひよんなことで急接近して何かが芽生えてんじゃない」

窓の外、グラウンドでは健吾がボールを蹴っている。

真希 「インスタントにまとめんな」

早苗 「さてこの後、どうなるでしょう」

早苗、懐から少女漫画を取り出し、トントンと叩く。

早苗 「このバイブルがどれだけ子羊を救ってきたことか」

真希 「早苗はまず新約聖書を読んで羊の意味を知った方がいい」

早苗 「こういう勉強苦手でしょ。人生の必修科目だぞ？」

真希 「今じゃない。受験生だ。色欲に溺れては国も傾くと白楽

天が……」

早苗 「色欲の自覚はあるんだ」

真希、手を止める。

真希 「……少しある。だから、苦しんでいる」

早苗 「……素直じゃん」

と、ニヤリ。

真希 「でもきつと偶然の一致が重なってるだけなんだ。雲の形を見て何かの動物だと思うようなもので、たまたまそういう話に見えてしまってるだけなんだ」

早苗 「そうかなあ」

真希 「第一、転校してまだ一週間しか経ってないわけで」

早苗 「十分。ロミジュリだって五日間の話だよ」

真希 「またそうやって」

早苗 「いいじゃん。当たって砕けろだよ」

真希 「関係ない。関係ないんだ。関係ないストーリーを当てこむな。私とはちょっと、ジャンルが違う」

と、無心に貼り絵を始める。

早苗 「……ふーん」

早苗、グラウンドを見やる。健吾と由良、談笑中。

早苗 「真希、ちょっとウチ寄ってきな」

7. 早苗の部屋（夜）

ドレッサーに座る真希。傍に置かれた眼鏡。

早苗の指南でカラコンを装着しようと悪戦苦闘。

早苗 「これでよし」

真希、パチパチして、鏡を覗き込む。

真希 「え、誰？」

真希、まじまじと覗き込む。

早苗 「あんただよ」

真希 「なんていうか」

早苗 「うん」

真希 「意外と捨てたもんじゃないな」

早苗 「結構、付けるタイプの魔法でしょ」

真希 「今朝カボチャのように浮腫んでいた顔とは思えない。ち

よっと良い茄子くらいには見える」

早苗 「ほら、もうそういうジャンルじゃないよ」

真希、ふと我に帰って、

真希 「あ、もしかしてこれって、そういう？」

早苗 「バレた？」

早苗の懐には、少女漫画。

8.

丸バツ高校・教室（朝）

真希、教室の戸の前で深呼吸。意を決して戸を開く。
クラスメートの女子、真希の顔を訝しげに見る。

真希 「お、おはよ」

女子 「え、真希ちゃん？ 誰かと思った」

真希 「コンタクトにしたんだよね」

と、そそくさ通り過ぎようとするが、

女子 「え？」

と、立ち塞がって真希を覗き込む。

女子 「……めっちゃいい」

と、真希の肩を両手で掴む。

女子 「めっちゃ可愛い？ ねえ、みんな見て」

と、女子たち数名、真希を囲んで誉め殺し。

真希 「なんとこれは青天の霹靂……」

女子 「え、何？」

真希 「……いや、ありがとう」

早苗、席でガッツポーズ。
健吾、席で呆然と見ている。

9. 丸バツ高校・教室（夕）

放課後の教室。真希、一人貼り絵を進めている。
真希のスマホ。早苗、「今から予備校や」の文面。
真希の傍には、件の少女漫画。

一つ息を吐いて真希、ふと手に取りパラパラめくる。
漫画の中でヒロインの女子、王子様風な男子と放課
後の教室で二人きり。

アクシデントで男子が転び、女子を床に押し倒す格
好に。二人、見つめ合う。

男子、「メガネ、かけない方が可愛いね」。

真希、たまらず漫画を閉じる。蒸気機関並みの鼻息。
と、教室の戸が開く。

驚いて振り向くと、そこには健吾。固まる。

健吾 「あ、真希ちゃんお疲れ」

真希 「……」

健吾 「ごめん、委員の仕事押し付けちゃって。今日部活早く終
わったから手伝えるわ」

と、健吾、歩み寄ってこようとす。

足元には貼り絵の道具などが散乱している。

真希 「待って」

と、咄嗟に大きな声。健吾、歩を止める。

健吾 「え？」

真希 「足元、気を付けて」

健吾 「え、ああ。うん」

健吾、足元を見やる。

真希 「……今ここで転ばれると、困る」

健吾 「え？」

真希 「困る。困るから」

健吾 「ああ、ありがとう？」

健吾、真希を警戒して、ゆっくりと歩を進める。

真希、その一挙手一投足に目を光らせ、身構える。

健吾、ようやく貼り絵の前で腰を下ろす。

真希、安堵。

健吾 「これ、貼ればいい？」

真希 「……枠の部分だけで良い。あとはクラスみんなでやる」

健吾 「……分かった」

二人、黙々ときこちなく貼り絵を進める。

健吾、真希の顔をチラッと見て、

健吾 「真希ちゃんってさ……」

真希 「（食い気味に）はい？」

健吾 「え？」

真希 「はい？ 何？」

健吾 「眼鏡さ」

真希、ビクツとして、健吾も軽くビクツとする。

健吾 「眼鏡、なんでやめたの？」

真希、軽く安堵。

真希 「……私はジャンルが違うから」

健吾 「え？」

真希 「こういうジャンルの私が必要な時もあるから」

健吾 「イメチェン、ってこと？」

真希 「って、早苗が」

健吾 「ああ、角田さん？ 仲良いよね」

真希 「確かにこいつは自信をくれた。でも、慣れない」

健吾 「うん？」

真希 「巧言令色だ。外面を偽って他人に取り入るのは恥ずべき

悪徳なんだ。これは論語。フェミニズムが百年の戦いで

獲得したものに唾を吐くような態度じゃなく、もっと素

直にこいつを楽しみたかった」

ポカンとしている健吾、ふと思いついたように何や

らポケットをガサゴソ。鍵を取り出して、

健吾 「……やべ。ちょっと部室の鍵、閉めてくるわ」

と、立ち去ろうとする。

真希、顔を上げる。目には涙。

健吾、驚く。思わず踵を返そうとして、机に躓く。

転んで、真希を押し倒すような格好に。

二人、見つめ合う。健吾、困惑。真希、涙を浮かべつつ、毅然とした表情。

健吾、じっと見て、

健吾 「真希ちゃん、俺、メガネかけない方がさ……」

真希 「知ってる」

健吾 「ん？」

真希 「お前に言われなくても、知ってるから」

由良の声 「センパイ、部室の鍵持ってますー？」

と、教室に入ってくるも、固まる。

由良 「……ごゆっくり」

と、戸を閉じる。

真希、軽く健吾を膝で押す。

健吾、ゆっくりと立ち上がる。

真希、涙を拭くと、コンタクトが外れる。

カバンから眼鏡を取り出して、かける。

(おわり)